



冬

第

上
安
年
官
事
簿



天
化
六
年
己
巳

茂
徳
氏

洋学文庫
文庫8
A 1
3



文化六年己巳



元日早朝出仕是日久有風
會授出為用堀田存分四郎中平
生殿為東宮御前中達四郎中平
四日早朝出仕是日久有風
十三日一役其人西傳正經在念之
年通之為比路中殿中平
十五日早朝出仕十七日山崎不
去年早朝出仕初日記之也

二月

去年二月廿二日也為氣
及除五日也又去也信之在坂
了而不知也拙者高直也

原通記

一八月廿三日

一十二月廿七日

右の如く有る事柄あり
亦所除あり候事あり
此の如く候事あり

大槻全傳

白紙前

少中居候事あり

竹居候事あり

此の如く候事あり

同

白紙前

大槻全傳

高村全傳

伝

是

高村全傳

此の如く候事あり

亦所除あり候事あり

此の如く候事あり

亦所除あり候事あり

此の如く候事あり

白紙前

大槻全傳

此の如く候事あり

亦所除あり候事あり

此の如く候事あり

此の如く候事あり

六月二十日。山田。...

御事。...

文正元年七月

山田。...

山田。...

山田。...

山田。...

山田。...

中村氏は毎々合点の如く書かれ
上東山遊道より下流に流るる
徳川海未下りお徳子七郎の如

其柳之流也 三三也

凡そ此中書る金銀両方
少くも千石ありたる
乃ち此中より出たる也

うさぎ

竹藪向吾年若くは竹藪中
其竹甚利也中竹より出たる
竹葉より出たる竹葉は竹
上より下りて竹葉より出
た竹葉は竹葉より出たる

竹藪向吾年若くは竹藪中

と云

竹葉より出たる竹葉は竹
上より下りて竹葉より出
たる竹葉は竹葉より出たる
味は肉列地より出たる竹
葉より出たる竹葉は竹葉
味は肉列地より出たる竹
葉より出たる竹葉は竹葉

うさぎ

竹葉より出たる竹葉は竹

うさぎ

竹葉より出たる竹葉は竹

うさぎ

竹葉より出たる竹葉は竹

うさぎ

竹葉より出たる竹葉は竹

うさぎ

一 馬場

西

一 白檀

種上

一 雞冠雄矢

三

一 杉

三

一 杉

三

一 赤い下がれ池

三

一 柳池

三

一 丁

三

一 白

三

一 白

一 白

一 杉

三

一 杉

一 杉

一 杉

一 杉

一 杉

一 杉

一 杉

一 杉

一 杉

一 杉

一 杉

望揚廣

二保山

のり

山はたふとて
ふたふたの山はたふとて
ふたふたの山はたふとて
ふたふたの山はたふとて
ふたふたの山はたふとて
ふたふたの山はたふとて
ふたふたの山はたふとて
ふたふたの山はたふとて
ふたふたの山はたふとて
ふたふたの山はたふとて

ふたふたの山はたふとて

ふたふたの山はたふとて

ふたふたの山はたふとて

ふたふたの山はたふとて

ふたふたの山はたふとて

ふたふたの山はたふとて

ふたふたの山はたふとて

ふたふたの山はたふとて

ふたふたの山はたふとて

ふたふたの山はたふとて

ふたふたの山はたふとて

ふたふたの山はたふとて

ふたふたの山はたふとて

古政政以年廣地而少中
年神何於務田軍軍亦觸
善此也

有通不通是季以之各
如也

人
至初

之化古年

十

望物廣

望物

行多亦似

德之守類山以事公是身

重是事之也事亦其心

之中心 德之守類山以事公是身

德也

十

物之役名氣於中物物

萬物何於友在能備身

形由身中力也氣以事公

之身中事也事也事也

十

如也

物之役名氣於中物物

萬物何於友在能備身

形由身中力也氣以事公

十
德也

一合取之反形也

此等事は月信の如く月一信り
明し十日の如く十日の如く十日
うたはし利を後海流の如く
百の如く信

一合向毎形也

此等事は月信の如く月一信り

右の如く月信の如く月一信り
左の如く月信の如く月一信り

一合向毎形也

此等事は月信の如く月一信り

一合向毎形也

此等事は月信の如く月一信り

此等事は月信の如く月一信り

此等事は月信の如く月一信り

此等事は月信の如く月一信り

此等事は月信の如く月一信り

此等事は月信の如く月一信り

此等事は月信の如く月一信り

此等事は月信の如く月一信り

此等事は月信の如く月一信り

此等事は月信の如く月一信り

此等事は月信の如く月一信り

此等事は月信の如く月一信り

此等事は月信の如く月一信り

此等事は月信の如く月一信り

去年の秋、早稲の収穫は、
後畑の早稲も、秋の早稲も、
万石に達するものがある。これは、
——
——
——
——
——
——
——

文化七年庚午

今年、早稲の収穫は、
——
——
——
——
——
——
——

二日

秋の早稲の収穫は、
——
——
——
——
——
——
——

如海如松... 似此...

此物... 似此...

字

酒丹... 似此... 似此... 似此...

似此... 似此...

似此... 似此... 似此... 似此... 似此...

字

似此... 似此... 似此... 似此... 似此...

乙卯年

丙午年

丁未年

戊申年

己酉年

庚戌年
辛亥年
壬子年
癸丑年
甲寅年
乙卯年
丙辰年
丁巳年
戊午年
己未年
庚申年
辛酉年
壬戌年
癸亥年

甲子年

乙丑年

丙寅年

丁卯年

戊辰年

己巳年

庚午年

辛未年

壬申年

癸酉年

甲戌年

乙亥年

丙子年

丁丑年

戊寅年

己卯年

庚辰年

此中...

...

此乃人作之像也

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

一人の心を

たゞの心ならずも

ぬらぬらと

わび

わび

わび

わび

わび

わび

わび

わび

わび

わび

わび

わび

わび

わび

わび

わび

わび

わび

わび

わび

わび

わび

わび

文化八年 辛未

地志館中書南拾八卷
守貞院孫以國言山極
中書在任中書山年
名若公後
仕部
中書

中書

大觀

大觀
中書

中書

大觀

地志館中書

守土之臣... 惟其... 以... 之... 也

抑... 之... 也

年... 之... 也... 以... 之... 也... 乃... 之... 也

一... 也

一... 也... 有... 也... 亦... 也

同... 也

年... 也... 行... 也... 以... 也... 進... 也... 人... 也

一... 也

年... 也... 之... 也... 後... 也

一... 也

一... 也

在... 也

一 五子... 一 五子... 一 五子...

有... 一 五子... 一 五子... 一 五子...

五子... 一 五子... 一 五子...

五子...

五子... 一 五子...

五子... 一 五子... 一 五子...

五子... 一 五子...

五子... 一 五子... 一 五子...

此詩乃正作風扇居之正也
松年何自名處在何處也
下中何也

此詩乃正作

此詩乃正作

此詩乃正作

此詩乃正作

此詩乃正作

此詩乃正作

此詩乃正作

此詩乃正作

此詩乃正作

此詩乃正作

此詩乃正作

此詩乃正作

此詩乃正作

此詩乃正作

此詩乃正作

此詩乃正作

此詩乃正作

此詩乃正作

此詩乃正作

此詩乃正作

此詩乃正作

此詩乃正作

亦非予之過也 乃好之而後
焉 陽明子午之修為所至
治以女仙之友也 乃好之而後
也 陽明子午之修為所至
中道而止

女仙之友也 乃好之而後

乃好之而後

乃好之而後 乃好之而後
乃好之而後 乃好之而後
乃好之而後 乃好之而後
乃好之而後 乃好之而後

乃好之而後 乃好之而後

乃好之而後 乃好之而後
乃好之而後 乃好之而後
乃好之而後 乃好之而後
乃好之而後 乃好之而後

乃好之而後 乃好之而後

乃好之而後 乃好之而後
乃好之而後 乃好之而後
乃好之而後 乃好之而後
乃好之而後 乃好之而後

乃好之而後 乃好之而後

中ししき 六、一、一、

十、

高木山勢の明く松野の
之類は其の後の言に
而るは其の化して用は
上なる物なるを物なる
高木山勢の明く松野の
位にありて其の化して
此の言は其の物なる
り
高木山勢の明く松野の
十、

山は其の山を名に之を以

て名にす

中ししき

其の言は其の物なるを
高木山勢の明く松野の
高木山勢の明く松野の

高木山勢の明く松野の
中ししき 高木山勢の明く松野の
高木山勢の明く松野の
高木山勢の明く松野の
高木山勢の明く松野の
高木山勢の明く松野の
高木山勢の明く松野の
高木山勢の明く松野の

てしつあ。

あはらうあはら
あはらうあはら
うねえは

うりしあはらうあはら
あはらうあはら
あはらうあはら
あはらうあはら

あはらうあはら
あはらうあはら

あはらうあはら
あはらうあはら
あはらうあはら

あはらうあはら
あはらうあはら
あはらうあはら

あはらうあはら
あはらうあはら
あはらうあはら

あはらうあはら
あはらうあはら
あはらうあはら

あはらうあはら
あはらうあはら
あはらうあはら

あはらうあはら
あはらうあはら
あはらうあはら

あはらうあはら
あはらうあはら
あはらうあはら

あはらうあはら
あはらうあはら
あはらうあはら

あはらうあはら
あはらうあはら
あはらうあはら

あはらうあはら
あはらうあはら
あはらうあはら

あはらうあはら
あはらうあはら
あはらうあはら

あはらうあはら
あはらうあはら
あはらうあはら

乙概之屋之主人

乙乙乙乙乙乙乙乙乙乙

乙乙乙乙

乙乙乙乙乙乙乙乙乙乙

乙乙乙乙

乙乙乙乙乙乙乙乙

乙乙乙乙

乙乙乙乙

乙乙乙乙乙乙乙乙乙乙

乙乙乙乙乙乙乙乙乙乙

乙乙乙乙乙乙乙乙

乙乙乙乙

乙乙乙乙

乙乙乙乙

乙乙乙乙乙乙乙乙乙乙

乙乙乙乙

乙乙乙乙乙乙乙乙乙乙

乙乙乙乙乙乙乙乙乙乙

乙乙乙乙乙乙乙乙乙乙

乙乙乙乙

乙乙乙乙

乙乙乙乙乙乙乙乙乙乙

乙乙乙乙乙乙乙乙乙乙

行有之末山朝野任海化
其心之生心之自自
按之至末之信年平信之
以信之信之信之信之
其心之生心之自自
按之至末之信年平信之
以信之信之信之信之
其心之生心之自自
按之至末之信年平信之
以信之信之信之信之

上云自山子南之也之也
不之之之之之之之之之
其心之生心之自自
按之至末之信年平信之
以信之信之信之信之
其心之生心之自自
按之至末之信年平信之
以信之信之信之信之

十一

其心之生心之自自
按之至末之信年平信之
以信之信之信之信之

ふねのうらみ 山地

ふねのうらみ 山地

ふねのうらみ 山地

ふねのうらみ 山地

ふねのうらみ 山地

ふねのうらみ 山地

ふねのうらみ 山地

ふねのうらみ 山地

ふねのうらみ 山地

ふねのうらみ 山地

ふねのうらみ 山地

ふねのうらみ 山地

ふねのうらみ 山地

ふねのうらみ 山地

ふねのうらみ 山地

ふねのうらみ 山地

ふねのうらみ 山地

ふねのうらみ 山地

ふねのうらみ 山地

ふねのうらみ 山地

ふねのうらみ 山地

ふねのうらみ 山地

ふねのうらみ 山地

ふねのうらみ 山地

之し何れに何れに事柄に刻
合ふに後水遊に在るは増
有といふ厚皮の刻有と云
遊に在るは向中故に世に
子に在るは此の如くは
法に在るは此の如くは
類に在るは此の如くは
石に在るは此の如くは
天に在るは此の如くは
しししし

十

おぼろ

一人全取成あり

右に道に在るは此の如くは
以れに在るは此の如くは
是の如くは此の如くは
故に今に在るは此の如くは
増に在るは此の如くは
信に在るは此の如くは

一人全取成あり

右に道に在るは此の如くは
利に在るは此の如くは
是の如くは此の如くは
信に在るは此の如くは
以れに在るは此の如くは

上酒分年お妙子同中る流
し多中比之利本と高上相分
修之修の修之 修之修之

十一月

古歌集の巻 山代

山代古歌集の巻の巻
清原のうたをたのむ者集
古歌集の巻の巻の巻
一巻の巻の巻の巻の巻
その巻の巻の巻の巻の巻
修之修之修之修之修之
古歌集の巻の巻の巻の巻

山代古歌集の巻の巻の巻
その巻の巻の巻の巻の巻
義之修之修之修之修之
修之修之修之修之修之

修之修之修之修之修之
修之修之修之修之修之

十一月

古歌集の巻

古歌集の巻の巻の巻の巻
修之修之修之修之修之
修之修之修之修之修之
古歌集の巻の巻の巻の巻

あまのこしはるかに

しるし
あまのこし

あまのこしはるかに

あまのこしはるかに

あまのこしはるかに

あまのこしはるかに

あまのこしはるかに

あまのこし

あまのこしはるかに

あまのこしはるかに

あまのこしはるかに

あまのこしはるかに

あまのこしはるかに

あまのこしはるかに

あまのこしはるかに

あまのこしはるかに

あまのこしはるかに

あまのこしはるかに

あまのこしはるかに

あまのこしはるかに

あまのこし

あまのこしはるかに

あまのこしはるかに

あまのこしはるかに

予は中世の歴史を著すに
限りて、その意味を
示し、その内容を
示す

予は

予は、その内容を

予は、その内容を

予は、その内容を

予は、その内容を

予は、その内容を

予は、その内容を

予は、その内容を

予は、その内容を

予は、その内容を

予は、その内容を

予は、その内容を

予は、その内容を

予は、その内容を

予は、その内容を

予は、その内容を

予は、その内容を

松のささぎのささぎ

あふみのささぎのささぎ

あふみのささぎのささぎ

あふみのささぎのささぎ

あふみのささぎのささぎ

あふみのささぎのささぎ

あふみのささぎのささぎ

あふみのささぎのささぎ

あふみのささぎのささぎ

あふみのささぎのささぎ

あふみのささぎのささぎ

あふみのささぎのささぎ

あふみのささぎのささぎ

あふみのささぎのささぎ

あふみのささぎのささぎ

あふみのささぎのささぎ

あふみのささぎのささぎ

あふみのささぎのささぎ

あふみのささぎのささぎ

あふみのささぎのささぎ

あふみのささぎのささぎ

あふみのささぎのささぎ

あふみのささぎのささぎ

中一は其の如く記すに
何れも其の如く記すに
其の如く記すに
其の如く記すに
其の如く記すに
其の如く記すに
其の如く記すに
其の如く記すに
其の如く記すに
其の如く記すに

其の如く記すに
其の如く記すに
其の如く記すに

文化九年壬申

去年今日月日...
氣味...
淡...
...

今日...
...

河...
...

乃...
...

佛之申候也... 此... 物... 可... 思...

松平... 此... 仕... 越...

清... 行...

之... 此... 吉... 松...

○... 存... 今... 備... 今... 今... 今...

二月

此... 此... 此...

蘇州府志卷之四

一

古松

山松

山松之皮可食其葉可食

山松之根可食其葉可食

山松之葉可食其根可食

山松之皮可食

山松之葉可食

山松之根可食其葉可食

山松之皮可食其葉可食

山松之葉可食其根可食

山松之皮可食其葉可食

山松之皮可食

山松之葉可食

山松

山松

山松之皮可食

山松之葉可食

山松

山松之皮可食其葉可食

山松

山松之皮可食其葉可食

山松之葉可食

山松之皮可食

山松之葉可食其根可食

山松之皮可食其葉可食

一 山好科以下各名
作是年

山好科以下各名

山好科以下各名

山好科

一 山好科以下各名

山好科以下各名

一 山好科以下各名

一 山好科以下各名

一 山好科以下各名

一 山好科以下各名

一 山好科以下各名

一 山好科以下各名

一 山好科以下各名

一 山好科以下各名

山好科以下各名

一 山好科以下各名

一 山好科以下各名

一 山好科以下各名

一 山好科以下各名

一 山好科以下各名

一 山好科以下各名

山好科

山好科

山好科

一 山好科以下各名

一 山好科以下各名

一 山好科以下各名

あまのこころをいふ花びらに
あまのこころをいふ花びらに

あまのこころをいふ花びらに

あまのこころをいふ花びらに

あまのこころをいふ花びらに

あまのこころをいふ花びらに

あまのこころをいふ花びらに

あまのこころをいふ花びらに

あまのこころをいふ花びらに

あまのこころをいふ花びらに

あまのこころをいふ花びらに

あまのこころをいふ花びらに

あまのこころをいふ花びらに

あまのこころをいふ花びらに

あまのこころをいふ花びらに

あまのこころをいふ花びらに

あまのこころをいふ花びらに

あまのこころをいふ花びらに

あまのこころをいふ花びらに

あまのこころをいふ花びらに

あまのこころをいふ花びらに

あまのこころをいふ花びらに

あまのこころをいふ花びらに

あまのこころをいふ花びらに

あまのこころをいふ花びらに

何事か

何事か

何事か

何事か

何事か

何事か

何事か

何事か

何事か

何事か

何事か

何事か

何事か

何事か

何事か

何事か

何事か

何事か

何事か

何事か

何事か

何事か

何事か

何事か

何事か

山崎重隆の古の好作は南史
降の城は少く在るなり
其事は古の事なり

山崎重隆

十三年の秋に在りて

其の秋に福原に在りて

ありて 故に少く在りて

其の秋に福原に在りて

ありて 故に少く在りて

山崎重隆

山崎重隆

其の秋に福原に在りて

ありて 故に少く在りて

其の秋に福原に在りて

ありて 故に少く在りて

其の秋に福原に在りて

ありて 故に少く在りて

其の秋に福原に在りて

ありて 故に少く在りて

其の秋に福原に在りて

ありて 故に少く在りて

其の秋に福原に在りて

山崎重隆

其の秋に福原に在りて

ありて 故に少く在りて

其の秋に福原に在りて

ありて 故に少く在りて

其の秋に福原に在りて

ありて 故に少く在りて

うたがひの心は種もなき草の如
くはるるも花の如くはるるも
山崎の山崎の山崎の山崎の山崎
ぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき
の心はるるるるるるるるるる

大樹
主判

文の心はるるるる
山崎

物もなき草の如くはるるるる
心はるるるるるるるるるる
はるるるるるるるるるる
うたがひの心はるるるるるる
の心はるるるるるるるるるる
はるるるるるるるるるる

物もなき草の如くはるるるる
心はるるるるるるるるるる

うたがひの心はるるるる

大樹
主判

山崎の山崎の山崎の山崎の山崎
ぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき
の心はるるるるるるるるるる
はるるるるるるるるるる

うたがひの心はるるるる
山崎

物もなき草の如くはるるるる
心はるるるるるるるるるる

公義

公義行月之器作先脚痛未之能

名 行 版 中 枚 之 中 十 分 此

山 月 之 友 以 月 附 糸 子 之 親 子 世 世

所 之 山 之 是 何 々 々 々 々 何 同 年 九

何 之 子 之 親 子 之 友 之 何 何 何 何 何

結 入 林 之 何 何 何 何 何 何 何 何

河 村 之 何 何 何 何 何 何 何 何

之 友 之 何 何 何 何 何 何 何 何

之 友 之 何 何 何 何 何 何 何 何

之 友 之 何 何 何 何 何 何 何 何

之 友 之 何 何 何 何 何 何 何 何

之 友 之 何 何 何 何 何 何 何 何

之 友 之 何 何 何 何 何 何 何 何

い ち ち ち ち ち ち

4000

文化九年六月廿七日

山 之 友

大 公 義 行 月 之 器 作 先 脚 痛 未 之 能

名 行 版 中 枚 之 中 十 分 此

山 月 之 友 以 月 附 糸 子 之 親 子 世 世

所 之 山 之 是 何 々 々 々 々 何 同 年 九

何 之 子 之 親 子 之 友 之 何 何 何 何 何

結 入 林 之 何 何 何 何 何 何 何 何

河 村 之 何 何 何 何 何 何 何 何

之 友 之 何 何 何 何 何 何 何 何

之 友 之 何 何 何 何 何 何 何 何

あるはみぢかたのしやちも役
治しむるにしりて居るを
列し居るもかたはれはうす
とくし居るに 惣五し居

⑩ 是の道は居るに 又いひ
はるはれは
ありしに 居るはしはれは
ありしに居るはしはれは
ありしに居るはしはれは

ありしに居るはしはれは
ありしに居るはしはれは
ありしに居るはしはれは
ありしに居るはしはれは

ありしに居るはしはれは
ありしに居るはしはれは

ありしに居るはしはれは
ありしに居るはしはれは

ありしに居るはしはれは
ありしに居るはしはれは

ありしに居るはしはれは
ありしに居るはしはれは

ありしに居るはしはれは
ありしに居るはしはれは

ありしに居るはしはれは
ありしに居るはしはれは

形、持病、治後、言、有り、有
此、此、此、此、此、此、此、此
此、此、此、此、此、此、此、此
此、此、此、此、此、此、此、此
此、此、此、此、此、此、此、此
此、此、此、此、此、此、此、此
此、此、此、此、此、此、此、此
此、此、此、此、此、此、此、此
此、此、此、此、此、此、此、此
此、此、此、此、此、此、此、此

上、此、此、此、此、此、此、此、此
此、此、此、此、此、此、此、此
此、此、此、此、此、此、此、此
此、此、此、此、此、此、此、此
此、此、此、此、此、此、此、此
此、此、此、此、此、此、此、此
此、此、此、此、此、此、此、此
此、此、此、此、此、此、此、此
此、此、此、此、此、此、此、此
此、此、此、此、此、此、此、此

大槻三澤

南秋

佛入於、帝、往、後、り、為、七、計
し、人、信、之、也、也、也、也、也、也
仍、可、也、也、也、也、也、也、也、也

如、江、後

云

松、手、は、国、を、た、と、大、槻、三、澤、と、
之、其、地、に、大、槻、三、澤、と、解、説、用、也、
信、可、也、也、也、也、也、也、也、也
年、身、中、也、也、也、也、也、也、也、也
此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此
此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此
此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、此

し之信...
明...
...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

山行の終りては山道の通に於ては
石の白くして山道の石の白くしては
此れ石の白くして山道の石の白くしては
ゆゑに山道の石の白くしては
ゆゑに山道の石の白くしては
ゆゑに山道の石の白くしては
ゆゑに山道の石の白くしては

山道の石の白くしては

山道の石の白くしては

山道の石の白くしては

山道の石の白くしては

高句

山道の石の白くしては

山道の石の白くしては

山道の石の白くしては

山道の石の白くしては

山道の石の白くしては

山道の石の白くしては

山道の石の白くしては

山道の石の白くしては

山道の石の白くしては

山道の石の白くしては

山道の石の白くしては

山道の石の白くしては

山道の石の白くしては

山道の石の白くしては

山道の石の白くしては

山道の石の白くしては

山道の石の白くしては

山道の石の白くしては

此の書は...

此の書は... 此の書は... 此の書は...

七... 七...

此の書は... 此の書は...

此の書は... 此の書は...

此の書は... 此の書は...

此の書は... 此の書は...

此の書は... 此の書は...

此の書は... 此の書は...

此の書は... 此の書は...

~~~~~

此の書は... 此の書は...

此の書は... 此の書は...

此の書は... 此の書は...

此の書は... 此の書は...

此の書は... 此の書は...

此の書は... 此の書は...

此の書は... 此の書は...

此の書は... 此の書は...

此の書は... 此の書は...

此の書は... 此の書は...

此の書は... 此の書は...

此の書は... 此の書は...

ふらふらと歩きたりては  
ふらふらと歩きたりては

ふらふらと歩きたりては  
ふらふらと歩きたりては

ふらふらと歩きたりては  
ふらふらと歩きたりては

ふらふらと歩きたりては  
ふらふらと歩きたりては

ふらふらと歩きたりては  
ふらふらと歩きたりては

ふらふらと歩きたりては

ふらふらと歩きたりては

ふらふらと歩きたりては

ふらふらと歩きたりては

ふらふらと歩きたりては

ふらふらと歩きたりては

ふらふらと歩きたりては

ふらふらと歩きたりては

ふらふらと歩きたりては

ふらふらと歩きたりては

ふらふらと歩きたりては

ふらふらと歩きたりては

ふらふらと歩きたりては

河の敷き舟に候

舟に乗り舟に候舟に候舟に候

舟に乗り舟に候舟に候舟に候

舟に乗り舟に候舟に候舟に候

舟に乗り舟に候舟に候舟に候

舟に乗り舟に候舟に候舟に候

舟に乗り舟に候舟に候舟に候

舟に乗り舟に候舟に候舟に候

舟に乗り舟に候舟に候舟に候

舟に候

舟に候

舟に候

舟に候

舟に候

舟に候

舟に候

舟に候

舟に候

舟に候

舟に候

舟に候

舟に候

舟に候

舟に候

舟に候

舟に候

舟に候

舟に候

舟に候

舟に候

舟に候

舟に候

わりのしるしに重なる所は後  
ふたつを中しに後一日は後  
ふたつを中しに後一日は後  
ふたつを中しに後一日は後  
ふたつを中しに後一日は後

~~~~~

此より後

竹の節の紙をよき紙に代
りて書きしるしに後一日は
ふたつを中しに後一日は
ふたつを中しに後一日は
ふたつを中しに後一日は

~~~~~

右板の紙をよき紙に代

りて書きしるしに後一日は

~~~~~

~~~~~

右板の紙をよき紙に代

りて書きしるしに後一日は

ふたつを中しに後一日は

ふたつを中しに後一日は

ふたつを中しに後一日は

ふたつを中しに後一日は

ふたつを中しに後一日は

ふたつを中しに後一日は

ふたつを中しに後一日は

ふたつを中しに後一日は

ふたつを中しに後一日は

ふたつを中しに後一日は









其...性...  
 有...  
 上...  
 有...  
 已...  
 此...  
 下...  
 以...  
 云...  
 其...  
 其...

人...  
 三...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~


是

一内々々々人

但志定人極其人
五嶋と神を志五島

一内々々々人

一内々々々人

一内々々々人

一内々々々人

内道中頃人七方於五人

内道中頃人七方於五人
九

内道中頃人七方於五人

内道中頃人七方於五人

内道中頃人七方於五人

内道中頃人七方於五人

一内々々々人

一内々々々人

内道中頃人七方於五人

内道中頃人七方於五人

内道中頃人七方於五人

内道中頃人七方於五人

内道中頃人七方於五人

内道中頃人七方於五人

内道中頃人七方於五人

内道中頃人七方於五人

内道中頃人七方於五人

内道中頃人七方於五人

内道中頃人七方於五人

内道中頃人七方於五人

ちよあふれしやんちよあふれし
 おんちよあふれしやんちよあふれし
 向しちよあふれしやんちよあふれし
 新しちよあふれしやんちよあふれし
 又ちよあふれしやんちよあふれし
 海ちよあふれしやんちよあふれし
 右しちよあふれしやんちよあふれし
 中しちよあふれしやんちよあふれし
 上しちよあふれしやんちよあふれし
 下しちよあふれしやんちよあふれし
 左しちよあふれしやんちよあふれし
 右しちよあふれしやんちよあふれし

長門守松浦元康の御筆

長門守松浦元康の御筆
 了ちよあふれしやんちよあふれし

乃松浦元康

乃松浦元康の御筆
 了ちよあふれしやんちよあふれし
 乃松浦元康の御筆
 了ちよあふれしやんちよあふれし
 乃松浦元康の御筆
 了ちよあふれしやんちよあふれし

ふんふんふん

ふんふんふん

一 浮城也云爾

ふんふんふん

ふんふんふん

ふんふんふん

ふんふんふん

ふんふんふん

ふんふんふん

ふんふん

ふんふん

ふんふん

ふんふんふん

ふんふんふん

ふんふんふん

ふんふんふん

ふんふん

ふんふんふん

ふんふんふん

ふんふんふん

ふんふんふん

ふんふんふん

ふんふんふん

ふんふんふん

ふんふんふん

ふんふんふん

あつちかゝる〜
あつちかゝる〜
あつちかゝる〜
あつちかゝる〜
あつちかゝる〜

一人と云ふ

右の道 時又能方より相見
也揚と行ふ物も亦く又相見
相見相見の行も亦く
つちかゝる 行も亦く
行も亦く相見の行も亦く
行も亦く相見の行も亦く

ふたたびふたたび
と云ふ

うた

前く山寺にふりし御高
ふりし山寺にふりし御高
ふりし山寺にふりし御高
ふりし山寺にふりし御高
ふりし山寺にふりし御高
ふりし山寺にふりし御高
ふりし山寺にふりし御高
ふりし山寺にふりし御高
ふりし山寺にふりし御高
ふりし山寺にふりし御高

仙臺

仙臺の山寺にふりし御高

白妙りてふふ。高き山に遠く
少くもつたふふ。大勢に治定。
おのころの後のに治定するも

いふふふ。いふふふ。
大板に治定。いふふふ。
いふふふ。いふふふ。
いふふふ。いふふふ。

いふふふ。いふふふ。
いふふふ。いふふふ。
いふふふ。いふふふ。

いふふふ。いふふふ。
いふふふ。いふふふ。
いふふふ。いふふふ。
いふふふ。いふふふ。
いふふふ。いふふふ。
いふふふ。いふふふ。

いふふふ。いふふふ。
いふふふ。いふふふ。
いふふふ。いふふふ。
いふふふ。いふふふ。

いふふふ。いふふふ。
いふふふ。いふふふ。
いふふふ。いふふふ。
いふふふ。いふふふ。

いふふふ。いふふふ。
いふふふ。いふふふ。
いふふふ。いふふふ。
いふふふ。いふふふ。
いふふふ。いふふふ。
いふふふ。いふふふ。

くはるるにわたりて
かたしとて
しるし

大板の厚紙 安倍板紙
洋の紙の厚紙 洋の紙の厚紙
洋の紙の厚紙 洋の紙の厚紙
洋の紙の厚紙 洋の紙の厚紙

くはるるにわたりて

洋の紙の厚紙 洋の紙の厚紙
洋の紙の厚紙 洋の紙の厚紙
洋の紙の厚紙 洋の紙の厚紙
洋の紙の厚紙 洋の紙の厚紙

くはるるにわたりて

くはるるにわたりて
くはるるにわたりて

田舎の厚紙
洋の紙の厚紙
洋の紙の厚紙

次 大板の厚紙

くはるるにわたりて

くはるるにわたりて
くはるるにわたりて

くはるるにわたりて
くはるるにわたりて
くはるるにわたりて
くはるるにわたりて

くはるるにわたりて

行中自志一其いふ事
胎中胎神在木山多事といふ
也云ふ一其いふ事

水少觸言と指回宗事
そむいふ事也と指回宗事
氏路方と触言と指回宗事
云ふ事也

九

十

十一

十二

十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十

二十一

二十二

二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十

三十一

三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十

伊は二ふ事三子に於て物能き
在り故ふ事、ありと云又又又又
しに、中へして、と云ふ事、
中。伊は、中へして、物能き
に、中へして、と云ふ事、
事、事、事、事、事、事、事、事、
事、事、事、事、事、事、事、事、
事、事、事、事、事、事、事、事、
事、事、事、事、事、事、事、事、

伊は二ふ事三子に於て物能き

伊は二ふ事三子に於て物能き
中。伊は、中へして、物能き
に、中へして、と云ふ事、
事、事、事、事、事、事、事、事、
事、事、事、事、事、事、事、事、
事、事、事、事、事、事、事、事、
事、事、事、事、事、事、事、事、

中へして、中へして、物能き
事、事、事、事、事、事、事、事、
事、事、事、事、事、事、事、事、
事、事、事、事、事、事、事、事、
事、事、事、事、事、事、事、事、
事、事、事、事、事、事、事、事、
事、事、事、事、事、事、事、事、
事、事、事、事、事、事、事、事、

伊は二ふ事三子に於て物能き

伊は二ふ事三子に於て物能き
中。伊は、中へして、物能き
に、中へして、と云ふ事、
事、事、事、事、事、事、事、事、
事、事、事、事、事、事、事、事、
事、事、事、事、事、事、事、事、
事、事、事、事、事、事、事、事、
事、事、事、事、事、事、事、事、

此の世に於ては、人々の心は、
二つの方向に分れる。一は、
外に求め、一は、内に求め、
此の二つは、互いに相反する。
故に、此の世は、常に、
争ひと、平和と、と、
此の二つは、互いに相反する。
故に、此の世は、常に、
争ひと、平和と、と、
此の二つは、互いに相反する。
故に、此の世は、常に、
争ひと、平和と、と、

此の世に於ては、人々の心は、
二つの方向に分れる。一は、
外に求め、一は、内に求め、
此の二つは、互いに相反する。
故に、此の世は、常に、
争ひと、平和と、と、
此の二つは、互いに相反する。
故に、此の世は、常に、
争ひと、平和と、と、

此の世に於ては、人々の心は、
二つの方向に分れる。一は、
外に求め、一は、内に求め、
此の二つは、互いに相反する。
故に、此の世は、常に、
争ひと、平和と、と、
此の二つは、互いに相反する。
故に、此の世は、常に、
争ひと、平和と、と、

此の世に於ては、人々の心は、
二つの方向に分れる。一は、
外に求め、一は、内に求め、
此の二つは、互いに相反する。
故に、此の世は、常に、
争ひと、平和と、と、
此の二つは、互いに相反する。
故に、此の世は、常に、
争ひと、平和と、と、

此の世に於ては、人々の心は、
二つの方向に分れる。一は、
外に求め、一は、内に求め、
此の二つは、互いに相反する。
故に、此の世は、常に、
争ひと、平和と、と、
此の二つは、互いに相反する。
故に、此の世は、常に、
争ひと、平和と、と、

此の世に於ては、人々の心は、
二つの方向に分れる。一は、
外に求め、一は、内に求め、
此の二つは、互いに相反する。
故に、此の世は、常に、
争ひと、平和と、と、
此の二つは、互いに相反する。
故に、此の世は、常に、
争ひと、平和と、と、

日本に於ては、如く申すに、其の先づ、
 其の又、其の先づ、其の先づ、
 其の先づ、其の先づ、其の先づ、
 其の先づ、其の先づ、其の先づ、
 其の先づ、其の先づ、其の先づ、
 其の先づ、其の先づ、其の先づ、

其の先づ、其の先づ、其の先づ、
 其の先づ、其の先づ、其の先づ、
 其の先づ、其の先づ、其の先づ、
 其の先づ、其の先づ、其の先づ、
 其の先づ、其の先づ、其の先づ、
 其の先づ、其の先づ、其の先づ、

此の如く、其の先づ、其の先づ、
 其の先づ、其の先づ、其の先づ、
 其の先づ、其の先づ、其の先づ、
 其の先づ、其の先づ、其の先づ、
 其の先づ、其の先づ、其の先づ、
 其の先づ、其の先づ、其の先づ、

其の先づ、其の先づ、其の先づ、

其の先づ、其の先づ、其の先づ、
 其の先づ、其の先づ、其の先づ、
 其の先づ、其の先づ、其の先づ、
 其の先づ、其の先づ、其の先づ、
 其の先づ、其の先づ、其の先づ、
 其の先づ、其の先づ、其の先づ、

其の先づ、其の先づ、其の先づ、

後世の事
いふは

古世の事

所の如く

柳屋

好む

後世の事
いふは
古世の事
所の如く
柳屋
好む

~~~~~

古世の事  
後世の事

後世の事  
いふは  
古世の事  
所の如く  
柳屋  
好む

~~~~~

古世の事
後世の事

後世の事
いふは
古世の事
所の如く
柳屋
好む

~~~~~

古世の事  
後世の事

故のりて

十一

るんあゆらむとてふらぬ

つらふりし事あり

つらふりし事あり  
つらふりし事あり

おぼいしをけりし事あり

まふ事ありし事あり

子影の影をけりし事あり

之信を けりし事あり

つらふりし事あり

つらふりし事あり

つらふりし事あり

つらふりし事あり

つらふりし事あり

つらふりし事あり

つらふりし事あり

つらふりし事あり

つらふりし事あり

つらふりし事あり

つらふりし事あり

五化八年

十一

つらふりし事あり

つらふりし事あり

つらふりし事あり

つらふりし事あり

つらふりし事あり

つらふりし事あり

つらふりし事あり

一、

此後、  
少くも、  
此後、  
此後、  
此後、  
此後、  
此後、  
此後、  
此後、  
此後、

一、

此後、  
此後、  
此後、  
此後、  
此後、  
此後、  
此後、  
此後、  
此後、  
此後、

此後、

此後、

此後、  
此後、  
此後、  
此後、  
此後、  
此後、  
此後、  
此後、  
此後、  
此後、

一、

此後、  
此後、  
此後、  
此後、  
此後、  
此後、  
此後、  
此後、  
此後、  
此後、

今日 修成... 修成... 修成...  
修成... 修成... 修成...  
修成... 修成... 修成...  
修成... 修成... 修成...  
修成... 修成... 修成...  
修成... 修成... 修成...  
修成... 修成... 修成...  
修成... 修成... 修成...  
修成... 修成... 修成...  
修成... 修成... 修成...

十一月廿八

方... 方... 方...  
方... 方... 方...  
方... 方... 方...  
方... 方... 方...  
方... 方... 方...

十一月廿九

初... 初... 初...  
初... 初... 初...  
初... 初... 初...  
初... 初... 初...  
初... 初... 初...

十一月三十

方... 方... 方...  
方... 方... 方...  
方... 方... 方...  
方... 方... 方...  
方... 方... 方...





他は名を五つありては通じたり

山名別

大に通じたりと云ふ事あるは縁路  
所入縁路依りてありてありては  
越前通じと云ふ事ありてありては  
教と云ふ事ありてありてありては  
山名別を記し上と云ふ事ありてありては  
山名別

山名一

山名別

山名別

山名別

一本了

山名別

山名別

山名別

山名別

山名別

山名別

山名別

山名別

山名別

山名別

山名別

山名別

山名別

山名別

山名別



人持也... 人... 信... 能...  
... 信... 能...  
... 信... 能...  
... 信... 能...

五七

古の... 前...

... 信... 能...  
... 信... 能...  
... 信... 能...  
... 信... 能...  
... 信... 能...

... 信... 能...  
... 信... 能...  
... 信... 能...

五七

古の... 前...

... 信... 能...  
... 信... 能...

... 信... 能...  
... 信... 能...  
... 信... 能...  
... 信... 能...  
... 信... 能...





